温故知新⑫

私がこの造園界に迷い込んだのは、大阪万博後の71年ころでした。デザイン系の大学の受験に失敗し、高校の先輩の八木マリヨさん（世界的な彫刻家です）に個人指導を受けていた関係で、彼女のお手伝いをしていたのですが、ある日ＥＤＡ造園という会社を紹介されました。最初の設計は階段だったと思いますが完成すると、人のお金（税金）を使って自分の好きなものができるのだと、感激したものです。その後、環境事業計画研究所大阪事務所となり、東氏や中見氏を中心に同年代の若者が集まりワイワイと仕事か遊びかわからないまま続きました。今はシンガポールで活躍されている北川さんと一緒になった頃は事務所の隣のスナックに入り浸りの日々でした。

ＣＬＡ支部活動も30歳代からお手伝いをしており、88年には現在も続く年末交流会を立ち上げ、事業委員としてはユニトピアささやまバスツアーを支部長の猛反対にかかわらず強行したり、交流会の継続にも反対の声が上がりましたが小笹先輩がバックアップしていただいたおかげで続けることができました。また、荒木邦芳氏には講演会をお願いした折には、温かくご指導いただいたことは若輩者にとってありがたいことでした。

仕事では数々の失敗を積み重ねましたが、何とか生き延びているように多少のことでは、人間ダメになったりしません。81年の宇部彫刻シンポや、84年の横浜水辺のシンポなどに参加する機会を得、その後水や彫刻に目が向いていきました。その時お会いした広松伝氏にはその後、映画「柳川掘割物語」の上映会と講演を頂き、飲み明かしたことが懐かしく思い出されます。

エポックと言えば90年の花博の国際庭園の設計業務でしょうか。開会直前まで工事が続きました。何せ直接、外国の設計担当者と打ち合わせするので、言葉も、共通認識の上でも・・。やはり、技術者としてとことん譲れない一線をもっていたように感じました。植栽に限れば殆どが学名表記であり、ふだんから認識を持つことの重要性を知りましたが？・・・

こうした中で、いろんな人に教わり、叱られながら恰好だけは一人前に見えるようになったわけですが、中でも石材の故上山正二さんには見積もりを依頼すると必ずといっていいほど朱の添削の入った見積書が返ってきたことが忘れられません。何せ造園の基礎知識ゼロからスタートしましたおかげで、わからないことは誰かれなく質問して教えていただきました。また、デッサンの訓練のおかげで打ち合わせの場でもすぐに画が書けることが、多少役にたっているようです。最近は設計にかかるとすぐにＣＡＤで作業にかかるようですが、やはりイメージづくり、素案の段階やコミュニケーションの手段としては手書きの方が、思いが伝わりやすいように感じます。

大石博
㈱環研究所代表取締役
ＲＬＡ登録ランドスケープアーキテクト
【経歴】1949年生まれ。神戸高校卒業。
【主な仕事】国際花と緑の博覧会国際庭園
（イタリア、エジプト、トルコなど9カ国）
武庫川団地、淡路島公園・淡路ハイウェイ
オアシス、高槻阿武山団地・上の池公園など